



乗り越えなければならないギャップ

若者の田園回帰・地方定住の動きは、本物であり定着しつつように感じる。とはいえ、特定の地域にかなり偏った動きであるようにも思う▼若者が定着し、地域の担い手として活躍しているところは、条件不利地域ほど多い。担い手の高齢化が著しく、もう自分たちにできることは限られており、若者たちに任せるしかない、と腹をくくっていることが共通する▼七〇代が頑張っている地域でよく聞かされるのが、「農業は儲からない」「苦勞ばかり」という言葉だ。農業の面白さや誇りを語るものはまずいない。これでは後継者が育つはずもない▼若者の多くは半農半Xしながら農業を楽しみたいとしており、中には自給生活や有機農業に強い関心を持つものも少なくない。これに対して高齢者から聞こえてくるのは、「若者は農業を分かちやしない」「こんなこともできない」。彼らが農業をやめれば、「若い者は辛抱がない」という常套句がオチ▼若者の農業への関心の高まり、実際に農業そのものに参画したいとする若者の増加。一方、高齢ながらも現役で頑張っている農業者の持つ固定的な農業観と若者観。この間に広がる深く大きなギャップ。これこそが今の農業現場が抱える最大の難問だ▼現状のままでは農業・農村の維持が困難であることは目に見えている。ここは農業者も、面白さも含めて農業の持つ能力を見つめ直してみると同時に、誇りを取り戻し、若者に間口を広げていくべきではないか。せつかくの田園回帰の流れを積極的に取り込んでいくだけの気概を是非とも持つてほしいものだ。

(土着菌)